

がらも、日本仏教の要職者ならびに学界関係者も含め、科学と宗教との調和による人類幸福という文脈において、おおむね好意的な評価に終始している。

新型動力炉の命名発案者・清成氏は新聞取材や自著の中で「（核燃料発電事業に対する）行く手を阻む抵抗に対して、それを排除するあらゆる策を講じ、そしてそれを果断に断行する不撓不屈の大勇猛心が是非必要であります。疾きこと風の如く、侵略すること火の如く、あたりを焼き尽くす熱意がなければなりません」と繰り返し述べている。

新型原子炉の命名の趣旨説明で、清成氏はさかんに「科学と科学の両立」を強調していたが、実際の核燃料発電事業の推進の現場においては、「侵略」性を隠そうとしない。もちろん悪意ではなく、「善意」としてではある。ここで言う「侵略」とは、抽象的かつ暗示的ではあるが、国策としての核燃料発電事業は結果的には人間の肉体・生活・文化・歴史などの総体への「侵略」行為ではないか。

この侵略は軍事力を伴ったあからさまな暴力ではなく、経済行為を通して、きわめて「平和的」「永続的」「効率的」に実施された。しかし、この広汎な侵略に関わる者の倫理的な矛盾は合理化され、解消されなければならない。このようにして、核燃料発電の不合理性や倫理的な矛盾に対して、文明化、経済発展、資源有効利用への使命という「善意」が生じるのである。

事故後、仏教者が「反原発」「脱原発」等の善意によってどう糊塗し偽装しようとも、総じて人間に対する侵略の同調者であった罪は消えない。

第十一部会

無常のシンボリズム——震災から考える——

長崎 誠人

二〇一一年三月一日（金）に起こった東日本大震災以来、「無常」という語をしばしば目にしたり、耳にしたりするようになった。そこでは、無常観によって大きな災害や危機を受け止めるとともに、それを基盤として人々の連帯や共同性を再構築し、相克性から相乗性へと転換できるとされている。しかし、どのようなシンボリズムにより理解されるかによって、無常観はまったく異なるものになるように思われる。

古今和歌集、平家物語、方丈記、徒然草といった古典文学作品に表れている伝統的無常観は、たしかに大きな苦難を諦念によって受容することを可能にするものである。また生きとし生けるものすべては無常を逃れることはできないということから、他者との連帯、共同性の基盤となりうる。とりわけそれによって生と死が一如であることが認識され、死者への共感が呼び起こされるのであった。

ここで理解したいのは、このような無常観は仏教の教えにのみ由来するのではないということである。そこには、自然風土というわれわれを取り巻く事物をシンボルとして無常が理解されたときに得られた意味が含まれている。

ところが、現代に目を転じてみると、たとえばオウム真理教では「無常」の理解がまったく変わっている。漠然とした不安

感やむなしさといった感覚から入信した若者が、仏教を宗教的源泉の一つとするオウム真理教において、自分たちの苦しみを「無常」によって捉えようとするのは自然なことだろうが、ここでは「無常」は法則性という意味での真理の把握によって克服可能なものと理解されていた。それは「ブラックボックス」、「データ」、「情報」、「エネルギー」、「レーザー・ホログラム」、「ロボット」、「光通信」、「コンピュータ」、「プログラム」、「クローン」といった彼らを取り巻く近代社会や情報社会の事物をシンボルとして「無常」が理解されたからだと思われる。無常を理解するのに自分たちを取り巻く事物によってという点においては伝統的無常観と変わる点はない。ただ取り巻く事物が変わったというだけである。しかし、シンボリズムの変化にともなう無常観の意味変化とその帰結は非常に重大なものであった。

わたしたちは伝統的な無常観を取り戻すことができるのだろうか。オウム真理教の事例を見てみると楽観はできないように思われる。もちろん現代の無常観には自然のシンボリズムが失われている、ただそれだけのことで、伝統的な無常観とオウム真理教に見られるような無常観とは無関係であり、伝統的な無常観を取り戻すことが重要なのだと考えることもできるかもしれない。しかし、われわれは自分たちを取り巻く事物をシンボルとして無常を理解してきたということが正しいとすれば、オウム真理教の事例はわれわれと無関係とは言えないであろう。というのも、それは「無常」が近代社会や情報社会のシンボリズムによって理解されると、それを予測可能性や操作可能性に

よって乗り越えようとしてしまい、自然や動物はいうまでもなく人間という他者までも操作対象とし、絆や連帯、共同性を大きく損ねてしまうということを示しており、しかも私たちが取り巻いているのはオウム真理教を取り巻いていたのとはほとんど変りがない環境であり事物だからである。

しかしそれでも今回の地震と津波によって、現代人の無常観がふたたび自然のシンボリズムと結びつく可能性はあるだろう。それは、わたしたちは近代的都市的環境ばかりではなく自然によっても取り巻かれているということを今回の事態によってあらためて強く印象付けられたからである。わたしたちは自然のシンボリズムを取り戻すことができるのだろうか、それとも何か操作可能なものによる無常の克服へと向かってゆくのだろうか。

震災死と宗教の役割——四川・東日本の大地震を事例に——

何 燕生

二〇〇八年五月一二日に発生した中国の四大地震では約八万人の死者を出した。一方、二〇一一年三月一日に発生した東日本大地震では約二万人の死者を出した。震災死は近年来、我々にとって最も身近な出来事の一つとなっているのだ。

本研究の目的は、この二つの地震に際して、そもそも宗教(者)はそれぞれどのような対応をし、また、被災者は宗教(者)にいったい何を求め、さらに、宗教(者)による公益事業の可能性は果たしてどこにあるのかを考察する中から、震災における宗教の役割を探ってみることにある。